

# やまのべ 偉人伝心 (安達峰一郎編)

## 9. 帝大生の身でフランス語翻訳や通訳をしていた安達峰一郎

### ●外人教授より国際法・仏語を学ぶ

明治22年9月、峰一郎は待望の帝国大学法科大学法律科(現東京大学法学部)に入学しました。そして成績が優秀だったためか、新入生の宣誓式で旗手を務めています。

帝大に入学してまもない頃から、宮城浩蔵の勧めで国から雇われた外国人の法学者ボアソナード(フランス)やパテルノストロ(イタリア)などの明治法律学校(現明治大学)や和仏法律学校(現法政大学)での講義の通訳を務めるようになりました。それほど峰一郎の語学力が抜群だったのと、法学についても高度な知識をもっていたということが言えます。やがては通訳だけでなく、講義も任されるようになりました。さらには、ボアソナードの著書『折衷両本位貨幣制度』やパテルノストロの著書『国際公法講義』を翻訳したり、峰一郎自身の論文が国民新聞(徳富蘇峰発行)や日本新聞(陸羯南発行)に掲載されるようになりました。そのため帝大での学費や生活費は親からの仕送りを受けずに、通訳や講義の報酬などで十分まかなうことができたようでした。

### ●山形で宮城浩蔵の選挙応援演説

当時、東京では同じ出身地の在京の学生などが中心になって盛んに同郷会が組織されていました。そのなかで、峰一郎は先に述べてきた活動だけでも多忙を極めていたにもかかわらず、同郷会である村山会や山形中学共同会、東北七州会、さらに五大法律校連合会などの仕事まで引き受けていたそうです。村山会は宮城浩蔵らが中心となって同14年から始まり、同22年当時の会員は122名で、内訳は東郡58名、南郡23名、西郡22名、北郡19名でした。この会でどのような仕事を引き受けていたのかは不明ですが、運営についての重要な役だったと想像されます。村山会には、おそらく先にも紹介した、山辺出身の遠山椿吉、石川尚益、垂石太郎吉、東海林泰庵、佐藤桂太なども参加していたと思われることから、東京弁に苦労した峰一郎にとって山形弁での交流が楽しく懐かしく感じたのではないかと想像されます。

このように多くの仕事を集中してこなすため、共同生活である下宿を一時離れて、隠れ家として高輪に一軒の空家を借りて仕事をしたそうです。

ほかにも峰一郎は、恩師の宮城浩蔵が同23年に日本で初めての衆議院選挙に山形第一区から

立候補したとき、学生でありながら山形で応援演説をしています。宮城は垂石太郎吉や大蔵の多田理助らの応援を受けて一位当選しました。その翌年も山形の丸万座で宮城らとともに“外交と法律”という演題で演説をしています。

### ●帝大生時代の活躍

同年5月に山形で創刊された新聞“山形日報”の創刊号に宮城や佐藤啓とともに“山形日報の発刊を祝して”として格調高い文を寄稿しています。峰一郎は学生の身でありながら堂々と演説をしたり、新聞に寄稿したりしていることから、山形での峰一郎の評価が相当高かったと考えられます。このように帝大の学生ながら校外での活動も盛んに行っていました。

帝大の教授は、「もはや安達には教えるものは何もない。」とまで言ったそうです。

また、司法省法学校から高等中学校・帝大と峰一郎と共に進み、後に首相になった若槻礼次郎は峰一郎について「安達君は語学の天才であった…安達君は数頭地を抜いて、同級生のなかでは語学は立派にできた…語学が上手であったために、国際法の講義をパテルノストロという人がやる、自分(峰一郎)が通訳する、その間に国際法はのみこんでしまったのであります。」と述べ、さらに「…非常な勉強家であり…非常に頭の良い人で…天性非常に人に親しみあるような方であります。」と、昭和10年の追悼座談会のときに述べているほどです。

こうして同25年7月、峰一郎は帝国大学法科大学法律学科を見事に卒業したのです。



帝大の卒業証書。安達峰一郎の生家に保存されています。

文：山辺町ふるさと資料館長 佐藤継雄

参考図書：『近代を拓いた明大創立者 宮城浩蔵』

明治大学校友会山形県支部発行 平成22年刊